様式３

令和２、３年度学校防災推進協力校　研究最終報告書

校　　名　　下田市立朝日小学校

校長氏名　　佐藤　知佐子

１　研究主題　　命を守る力の育成　～気づき、考え、行動する姿を通して～

２　学校の実態（教員数１２名、学級数６、児童数１００名）

朝日小学校は、下田市の中心より南西3キロメートルに位置し、国道136号線に接している。地区の中央部を走る136号線は交通量が多く、連休や夏場の交通量と観光客のマナーなど児童への影響で憂慮するべきものがある。

南海トラフ巨大地震の最大被害想定は、浸水深が6メートルである。本校は、海抜４メートルの位置にあるので、大地震の場合には津波が２階校舎まで達するが、屋上までの外階段はない。津波到達時間は18分と予想されているためこれまでも避難訓練を重ね、子供の命を守るために何ができるのか考えてきた。

大地震が起きた際の第一時避難場所である多景山は、学校の裏手、海抜26メートルの位置にあり、避難訓練では、およそ１００名の児童が７分以内で避難できている。山頂には、学校と地区の防災倉庫がそれぞれ1台ずつ置かれている。地域の方々が、日頃より多景山までの避難路や避難場所の草刈り、整備を行ってくださっていたが、最近では高齢化の影響もあり、整備が問題となっている。また、多景山は急傾斜地の崩壊区域となっており、令和元年度の台風19号による倒木や、イノシシなどの鳥獣による落石も報告されている。保護者からは「多景山は、想定を超える津波が来たときに、さらに上へ登ることができない。」「水が引くまで陸の孤島になってしまうのではないか。」「避難場所としてベストなのか。」等の心配の声が上がっている。

そこで、子供の命を守り、輝かせる学校経営をめざし、すべての子供の安全・安心を学校組織体制で守るために、防災教育を学校教育活動の柱に位置付け、地域や行政・保護者と連携を図りながら、学校安全計画を見直そうと考えた。また、児童が自分の命を守るために十分な「知識や技能」「判断力・行動力」を身に付けることができるよう、いろいろな教科と関連させ横断的な防災教育に取り組んでいくことにした。

さらに、実際に大地震が発生した時には、児童はもちろんのこと、保護者や地域住民の協力は欠かせない。互いに思いやり関わりながら行動する「他者と関わり人を思う気持ちの涵養」を大事にしたい。年間を通じて実施した子供たちの取組や内容は、防災かわら版を通じて保護者や地域に返し、啓発を図っていく。

３　研究経過

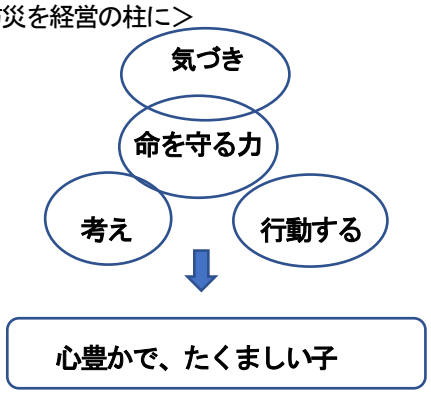
（１）研究の全体計画

＜目指す姿＞　命を守る力の育成
～気づき、考え、行動する姿を通して～

防災の面での態度目標

気づき	・防災面での課題に気づく ・他人の優しさや自分の良さに気づく
考え	・解決方法はないか、考える ・相手の立場を考え、相手を受け止める
行動する	・自分なりに考えたことを行動に移そうとする ・相手に伝え、コミュニケーションを取る

＜防災を経営の柱に＞



＜仮説＞

（１）　防災教育の推進と充実

・児童が、自分の身を守る方法を理解し、よりよく判断することや具体的行動について試行錯誤することで、自分の命を守る力を身に付け、「たくましい子」に成長するだろう。

・職員が、防災教育の付けたい力やめざす子供の姿を共有することで、防災への学びを深めることができるだろう。

○付けたい力　　静岡県「学校安全計画推進のために」

① 知識・技能の習得―危険な状況や、身を守るための方法を理解する

② 判断力・行動力の育成―危機回避を適切に判断し、主体的に行動できる

③ 他者と関わり人を思う気持ちの涵養―地域や家族を思い自分ができることを考え協力しようとする

（２）　かかわる場の工夫と、学びの発信

・児童が、友達や保護者・地域の方とかかわり、相手の立場や思いを想像したり温かく接したりする場を工夫することで、自分にできることは何か考え「心豊かな子」に成長するだろう。

＜研究方法＞

○防災教育の推進・充実

① 研究組織の明確化

② 学校安全計画の見直し

③ 付けたい力の明確化

④ 教科横断的な学習

⑤ 行動力・判断力を育む避難訓練

⑥ 朝礼での講話

○かかわる場の工夫と、学びの発信

① 非常食を作ろう～弁当の日に全校で

② 保護者への啓発を図る展示と避難訓練

③ 防災連絡会議の充実

④ 総合的な学習での発表

⑤ 保護者・地域への発信

静岡県学校安全教育目標
「自他の命を守るための適切な判断・行動ができる人」の育成

ジュニア防災士の取得

地域へ貢献

（２）研究組織

ア　防災管理（教頭）

・市防災課、自主防、賀茂地域局との連携　・学校安全計画の見直し（課題を改善）

・防災の視点から見た定期的な安全点検　・防災連絡会議・備蓄品の点検、防災倉庫への搬出入

イ　防災教育（研修担当）

・授業計画―教科横断的な学習～総合的な学習、学級活動、道徳、教科等で一人一授業

・学習の成果と課題を明確にし、学習の足跡を残す

ウ　避難訓練（防災担当）

・防災計画、防災マニュアルの見直し　・避難訓練の見直しと計画、渉外

・地域の危険場所の確認　・外部人材を活用した授業の推進（６月）

エ　発信（校長・担任）

・保護者、地域への情宣や啓発活動

（３）防災教育の充実と推進

①　学校安全計画の見直し

防災教育を現在の教育課程に体系的に位置づけるとともに、「学校安全計画」や「防災教育全体計画」を無理のない形で実行できるように見直した。非常に回数の多かった避難訓練等もスリム化し、実行した際は必ず振り返りを行い、次に実践するときには課題を改善するようにした。

朝日小学校　防災推進研究構想

「心豊かで　たくましい子」
～気づき、考え、行動する子～

命を守る力の育成
学校評価「防災教育で命を守る力が育っている」95%　「地域の防災訓練に参加する 60%」

主体性に学ぶ子

高学年	① 身を守る決まりごとの理解 ② 災害発生メカニズムの理解 ③ 備えの大切さの理解 ④ 危険に対する情報の理解 ⑤ 簡易的な応急手当の習得	① 危険回避できる力の育成 ② 避難行動ができる力の育成 ③ 考えをレポートにまとめる力の育成 ＜自助・共助＞	① リーダー性の協調性の育成
中学年	① 身を守る決まりごとの理解 ② 災害発生メカニズムの理解 ③ 備えの大切さの理解	① 危険回避できる力の育成 ③ 避難行動ができる力の育成 ＜自助＞	① 他者への安全配慮
低学年	① 身を守る決まりごとの理解 ② 危険個所等の認識	① 危険回避できる力の育成 ② 避難行動ができる力の育成 ＜自助＞	① 地域や家庭の生活に関心を持つ

知識・技能の習得	判断力・行動力の育成	他者と関わり人を思う気持ちの育成
・防災や災害に関する基礎的な知識・直接的内容	・災害発生時にどのように判断し、行動するか	・災害発生時に、人として取るべき根底となる優しさやたくましさ

②　付けたい力の明確化

令和２年３月に静岡県から出された「命を守る力を育てる～学校安全計画推進のために」の指導資料とからめ、本校の防災で目指す子供像を「命を守る力の育成」とした。自他の命を守るために適切な判断・行動ができる子供たちを育てるために、付けたい力を３観点とした。

各学年、年度初めに学習内容を整理し、３つの力を付けるためにどのような防災学習を推進するのか既存の教科等年間指導計画を見直し、構想することに時間をかけた。

③ 教科横断的な学習

防災を核とした教科横断的な学習をめざし、年間で１回は、授業実践するとともに、学期末には付けたい３つの力について振り返り、課題と成果を明確にするようにした。いくつかの実践例を紹介する。

＜３年生＞備蓄品について考えよう（学活・算数）

避難場所である多景山で24時間過ごすことを想定して、防災の予算でどんな備蓄品を買うのがよいか考えた。防災倉庫に入っている備蓄品の一覧表を参考に、残額63,000円の中で何をいくつ買うのか予算立てを行った。「野菜スープは栄養バランスがいいが、全校の分を買ったら予算がなくなってしまう。」「アルミブランケットや寝袋は、必要。真っ暗な中で寒さに震えたくない。」など、高学年顔負けの意見が出た。実際に、要望の多かったアルミブランケットを購入し、防災倉庫に保管した。

＜４年生＞地域の偉人～防波堤を作った今村伝四郎正長～（社会）

社会で、下田の防波堤作りに貢献した偉人である今村伝四郎の功績を学んだ。その後、国語の学習と合わせ功績をキャッチフレーズにし、相手に伝える学習を計画した。「下田の恩人正長」「努力の人」「私財をなげうち防波堤作り！」など、どんなキャッチフレーズなら分かりやすいのか、友達と学び合い言葉を磨いた。隣校の下田小学校校歌にも今村伝四郎正長が登場することにふれると、キャッチフレーズを生かした新聞つくりに主体的に取り組んだ。

＜５年生＞フィールドワークで逃げ地図作り（総合的な学習）

総合的な学習で「防災」をテーマに１年間学びを重ねた。地域の外部講師を招き、フィールドワークに出かけ気づいたことを「逃げ地図」にまとめていった。３回のフィールドワークで得られた情報を適宜見直し地図を更新したり、他の班と意見交換したりすることで、学びが深まっていった。また地域防災局とも連携し、DIG、HUG、判断ゲーム等の演習を行った。昨年は、東日本大震災から10年の節目だったこともあり新聞社やテレビ局からの取材を受けた。はきはきと取材を受ける児童の様子から、学びの深まりを感じた。

＜５年生＞自然災害によるけがの防止（保健、家庭科）

保健でけがの手当てを学んだ子供たちが、家庭科のミシン縫いで作ったバンダナを使って災害時の応急手当てを、養護教諭から学んだ。ふだん、防災教育にかかわることの少ない養護教諭だったが、自然災害での応急手当の仕方を５年担任と一緒に授業を考え、積極的に児童の学習にかかわることができた。

④ 行動力・判断力を育む避難訓練

避難訓練は、マンネリにならないように昨年度の反省や課題を生かして内容の見直しを図った。防災担当が様々な状況を想定し、判断力が問われるような訓練を考えるようにした。たとえば、

・休み時間、いつもの避難路が土砂でふさがれ、通行不能になった場合
・けがで動けなくなり、裏山まで児童全員が避難できない想定を、担任に内緒で行った場合
・避難訓練がいつあるのか、児童や教員に周知せず行った場合

訓練後には、訓練の様子や子供たちの感想を職員会議で出し合い、次に向けて課題への改善を図った。６年生のリーダー性を伸ばし課題改善につながる、計画にはない臨時避難訓練も実施した。

⑤ 朝礼での防災講話

朝礼を、防災について全員で考える場として活用した。

11月は備蓄品のことにふれ、水や食料だけでなく携帯トイレの備蓄も忘れてはいけないことを取り上げた。生きる上で、飲むこと、食べること、排泄することはセットであり、食べることは少しの間我慢することはできるが、排泄することは、我慢できないこと、災害発生時、水が止まってしまった場合、備蓄トイレの備えがあれば安心であること等を話した。非常用のトイレセットは、抗菌性の凝固剤が汚物を素早く固め400MLほどの水がスライム状態になることや、臭いを素早く閉じ込める優れた品であり、様々な感染症を防ぐ効果があることも紹介した。

2月には、岩手県の釜石東中学校を取り上げ、学校から800メートル離れた避難場所の福祉施設からさらに高台にある別の福祉施設へ避難し助かった様子を伝えた。釜石の奇跡を生んだのは、日頃からの訓練であり、訓練に対する真剣さがとっさの避難行動につながったことを理解し子供たちは、改めて訓練の大切さを感じたようであった。

12 月には、防災担当が、大地震が来たときの「朝日小の置かれている状況」と「避難」について話をした。今までの避難訓練を振り返り、子供たちから考えていることを出し合ったところ、様々な学年から次々に意見が出された。この日は、読売新聞社石巻支局から記者が訪れ、朝礼の様子を参観した。全校の前でも臆することなく話す子供たちの姿を見て、記者も驚いていた。

（4） かかわる場の工夫と、学びの発信

① 非常食を準備しよう

６年生が、弁当の日、全校児童の非常食準備に挑戦した。カセットコンロで大量の湯を沸かし、アルファ米やインスタントカレー作りを行った。教師の分を入れて150食分の用意をしたことで、実際に災害が起きたとき、1食分の食事を用意することの大変さを学んだ。片付け後は、低学年に「ありがとう」と感謝されリーダーとしての充実感や、非常食の予想外のおいしさを感じるとともに、「水がなかったら、今日のご飯を食べることはできない。」「地震が本当に起きたとき、どれだけのことができるのだろう。」という不安も感じたようだ。

カレーを試食した低学年は「６年生が用意した非常食は、意外においしかった。」「今回はお湯で温めてくれたけれど、お湯がなければ冷たいご飯やカレーを食べることになる・・・」と感想をもった。学習したことを生かし、様々な学年とかかわることで自分たちにできることは実践しようという気持ちが高まった。また、今回はカレーだったが、その他の非常食はどうなっているのか試食してみたいという気持ちも高まっている。

＜リーダーとして動く6年生＞

② 保護者への啓発を図る展示と避難訓練

参観日には、様々な防災グッズ等を展示し保護者への啓発を図った。備蓄品は３日から１週間の備えが必要だと言われている。食料は関心が高いのでどの家庭でも準備をしているようだが、食料以外のあまり知られていないような品を並べ手に取ってもらえるように心がけた。総合的な学習で「防災」をテーマに学ぶ５年生も、各自が家族の顔を思い浮かべながらどのような備蓄品を用意したらよいか考え、発表会で紹介した。

また、一日参観日には、予告なしの臨時避難訓練を行い、保護者の参加も呼び掛けた。地震発生時の一時避難だけだったが、子供だけでなく保護者も一緒に窓から離れ、ダンゴムシの格好で頭を守ることができた。災害はいつ起きるか分からないため、来年以降も続けてほしいとの好意的な意見を保護者からいただいた。

＜保護者参加の避難訓練＞

さらに、一日参観日にはどの学年でも防災授業を公開している。地域防災局講師との打ち合わせの時間を事前に設け、子供の実態を考慮し保護者の関心が高まる内容になるように担任と知恵を出し合い工夫している。親子で防災について学習することで、家庭での会話も弾むようである。

③ 防災連絡会議の充実

行政や保護者、地域の方をお呼びして、毎年１回行っている防災連絡会議を見直した。会議ありきではなく、テーマや会議の仕方、企画や運営の充実を図った。

ア 避難場所の検討

令和２年度、「災害時の避難について～状況に応じてどう対応するか～」をテーマに防災連絡会議を行った。前期の学校評価で、「多景山は、避難場所として適当なのか」というご意見をいただいたので皆さんで多景山について考える場とした。常葉大学大学院の重川希志依教授による講演後、少人数によ

るグループワークを行い、来ていただいた方の発言を多くいただけるようにした。重川教授からは、ふだんから備えをしておくことが大事であり、避難場所が心配ならば、違う場所を見に行き行動に移すことが大切だと背中を押していただいた。

そこで、防災会議を終えた１週間後、全校で別の場所への避難訓練を実施した。事前に何回も下見し「土砂災害が起きて多景山に避難できなかったら」というケースを想定して避難することにした。多景山以外にも避難訓練ができたことは、「行動する」ことの第一歩につながった。児童は、学校裏の多景山に避難することと比較して「暑くて遠かった。」「横断歩道を横切るのは大変だった。」など様々な感想を持った。しかし、災害はいつ来るのか分からないうえ、多景山に登ることができなかったら、遠くても道路の横断が危なくても、違うところへ逃げるしかない。児童の防災技能を高めることはもちろん予想しない状況に対して自分の命を守るために、実行できる子供を育てていきたいと感じた。

イ　６年生の参加

今年は、６年生２２名も会議に参加し、子供と大人が一緒になって防災について考える会議とした。子供が一緒に入る防災会議の意義はどこにあるか話し合ったところ、子供から次のような意見が出た。

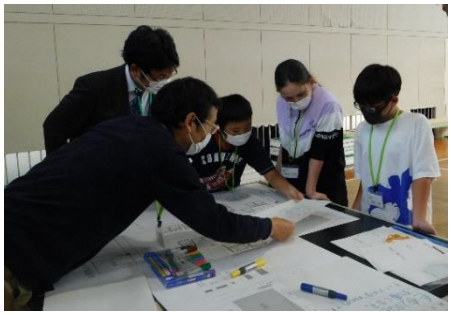
- 子供が入ることで、大人が考えないような柔軟なアイデアが出せる。
- 参加する人数が増えることで、たくさんの考えが集まる。
- １年生の時から避難訓練や防災の勉強を積み重ねているので、防災の知識がたくさんあり、学んできたことを意見としてたくさん出せる。

６年生は、ジュニア防災士の資格を取ったり、総合的な学習の時間に防災をテーマに学習を進めたりしたが、資格を取って終わりではなく、防災リーダーとして防災会議の企画や進行、基調提案を務めることはできないか考えた。テーマは「自分たちに何ができる？避難所運営」とし、１１月の会議に向け準備や練習を重ねた。当日のグループ活動でも、今までの学習を生かして積極的に意見を出し地域の方々と避難所運営に協力したいという思いをもつことができた。

また、昨年から防災会議に参加・参観いただいている重川希志依教授にも、指導・助言をいただき次年度への向けての成果・課題を確認することができた。

＜児童一緒の事前の打ち合わせ＞

＜６年生からの基調提案＞



＜8 つに分かれてのグループワーク＞

④　総合的な学習での発表

昨年は、コロナウイルス感染症予防のためできなかったが、毎年２月に総合的な学習の成果を発表する「はまぼう発表会」の開催を予定している。５年生は、防災で研究してきたことを全校の子供たちや保護者、地域の方に発信する場としてポスターセッション形式で発表する。

＜目指す姿＞
- 分かったことを伝え、地域に広める。
- 伝えるために、まとめ方を工夫する。
- 全校に発表する前に、学年団等で交流する場を設けもう一度発表の仕方を見直し改善する。
- 表現することの楽しさを知る。

子供たちは、探求する楽しさや表現する楽しさを学ぶとともに、地域の人とかかわりながら学び、地域に発信する活動につなげている。

⑤ 保護者・地域への発信

学級で取り組んだ防災学習や行事の様子は、保護者へ知らせ啓発を図るとともに、職員の発信力を高めることをねらい、「防災かわら版」を２ケ月に１回程度発行した。保護者はもちろんのこと、地域の方にも配布することで有事には地域の方との連携が大切であることを発信していった。また、学級だよりでも、発信を行う学級もあり、教職員の防災に関する意識も高まっている。

（５） 研究成果、次年度以降の課題等

成果

① 子供たちは、朝日小学校が津波浸水域にあるという課題を真剣に受け止め、防災学習や訓練に前向きに取り組んだ。全校体制で防災教育に取り組んだことで、防災意識が高まり自分の身は自分でを守ろうとする力が向上した。

（学校評価：「防災学習に真剣に取り組んだ」目標ＡＢ95％―児童評価100％、保護者評価98％
「地域の防災訓練に参加する」　目標ＡＢ60％―児童参加63％）

② ５・６年生がジュニア防災士の認定を受けたことで、どの子供もこれからは地域の力になって働こうという前向きな気持ちを持つことができた。主体的に地域とつながり、避難時協力したい、手伝いたいという気持ちだけでなく、近所の人とあいさつを交わし顔見知りになることが、いざという時に役立つという意見もある。日頃の何気ない地道な取組が大事だという認識につながった。

③ 毎年の防災連絡会議は、「会議ありき」ではなく、本校の課題を見据えた内容にシフトしている。大人の防災意識や関心も高まりつつあるので、これからも無理なく進め続けられる会議を考えていきたい。

課題と次年度へ向けて

① 次年度以降、これまでと同じように防災教育に時間をかけるわけにはいかない。これからはＩＣＴを活用した疑似体験的な避難訓練など、限られた時間の中で一層充実した内容を考えていく。

② 子供たちの学びが一過性のものになってしまわないよう、地域の方との結びつきを強くし、地域への活動に興味を持っていくよう投げかけていきたい。

③ コロナ禍で地域の防災訓練も思うように実施できていない。また、様々な事情で、地域の防災訓練に参加しない児童が令和３年度は４８％だった。これからも地域の方と連絡を取りながら、地域とかかわる子供をめざしたい。